

おおさか  
KEY  
ワード  
第37回

傘化けに提灯お化けがひゅーどろどろ

ほんとは大好き夏の風物詩



写真：  
橋義陳『宝つかみ取』  
(1812年)の挿絵。  
義陳は『弘法大師奇妙記』  
などの著作もある。

「怪談”や”お化け屋敷”で涼みましょと言われても、夏の暑さに熱中症、電力問題を考えた方が、ゾツとして怖い」と言われそうだが、なにせ蒸し暑い日本である。幽霊や妖怪などの怖い話を聞いたり、見世物興行の”お化け屋敷”で涼くなるというのは夏の風物詩であり、どこか懐かしくもある話である。

大阪は”怪談”と関係が深い。古くは、曾根崎に生まれ、医者を開業していた上田秋成(1734~1809)が、近世文学の金字塔である怪異小説集『雨月物語』を書いている。『雨月物語』は名匠・溝口健二監督によって映画化され(1953年公開)、ヴェネツィア国際映画祭では銀獅子賞をとっているのが世界に知られた物語であろう。他に、「婆々畳」「禿雪隠」などネーミングのセンスがなんともな大坂城の”怪談”があったり、国文学者の高田衛先生が江戸から明治の”怪談”を集めた『大坂怪談集』(和泉書院 1999年)も刊行されている。

現代では、実話怪談のブームに火をつけた『現代百物語 新耳袋』の著者・木原浩勝、中山市朗の両氏も大阪芸術大学のご出身で、全10巻に及ぶ同シリーズに大阪を舞台としたエピソードも数多く収録され、「怪談」を楽しむイベントも各所で行われるようになった。

読んだり聞いたりして想像力を刺激される”怪談”に対して、体ごと五感で恐怖を体験する空間が”お化け屋敷”だろう。私のこども時分、近所の神社の夏祭には二軒もお化け屋敷が出て、「こわくない愉快なお化け屋敷、たのしいお化け屋敷」と呼び込んでいたのが印象的だった。

天神橋筋6丁目にある「大阪市立住まいのミュージアム 大阪くらしの今昔館」も、夏になるとボランティアさんたちの手作りで「今昔館で『肝だめし』」を開催する

(今年は8月10日〔土〕~12日〔月〕)。博物館には幕末の少し前、180年前の大坂の町並みが再現されており、復元された町家が密集する大坂の町に、傘化け、提灯お化け、火の玉や幽霊、妖怪が跳梁跋扈する。お化け役もおどかし方のツボを心得ている上に面白くもあり、建物が仮設ではなくホンモノだけに迫力がある。

また、すでに終了したが大阪歴史博物館の特別展「幽霊・妖怪画大全集」が好評だったように、幽霊、妖怪を描いた絵も人気がある。融通念仏宗の総本山・大念仏寺(JR「平野」より南へ徒歩5分)では、地域が一体となった「平野町ぐるみ博物館」の一環として毎年8月の第4日曜日に「幽霊博物館」を開館する。幽霊が残した「亡女の片袖」と、〈累怨霊の図〉〈平知盛亡霊図〉など大阪歴博にも展示された幽霊画の掛け軸12点が公開される。

本ページ上の絵は、仏教書『宝つかみ取』(文化9年刊)にある亡霊図である。文化6(1809)年、淀屋橋南詰の讃岐問屋の船頭・金松屋吉兵衛が「助けてくれ、恐しや恐しや」と錯乱した。商用で谷町から農人町付近を歩いていると、「我を負うてくれよ」の声がして何か背中へ飛びつき、重さは山の如く、悪寒がとまらなくなった。そこで四国八十八所を21回も巡礼したという、霊験あらたかな本書の著者である義陳の登場である。「邪霊散」なる薬を用いたら3日目に回復したという。薬の名前も怪しげだし、宗教宣伝の書物だろうが、プロレスラーなみの体型なのに弱った船頭とドクロ顔の坊主の奇怪な姿が妙にリアルである。

私なども雑用に追われ、こんな弱った顔で歩いているかと思うと、それはそれでゾツとする。この原稿の締めきりがずしりと乗っかっていたりして……。